

論文内容の要旨

申請者 有家 香

論文題目

2年目看護師のチームにおける看護実践の様相

Nursing Practice from Second Year Nurses' Perspective on Team Practice

I. 研究の背景

2年目看護師は、知識や技術の修得を目指した受動的な学習から、役割を遂行するための自主的な学習や看護の知を探求し始める重要な学習への移行期であると言われている(杉田他, 2018a)。2年目看護師への教育の重要性は認識されているものの、どのように育成していくか模索されている。この時期の看護師が1年目の課題をどのように乗り越え、個々の場面で状況を判断、行為し、チームメンバーとしての実践力をどのように学んでいるかについては、これまで、当事者の視点から明らかにした研究は十分にはなされていない。2010年に新入職看護職員研修の努力義務化によって、新人看護師の教育プログラムの整備が進められてきたが、看護実践能力は多岐にわたり入職後2年間を掛けて修得するようになってきている。本研究は、このような現状を踏まえ、2年目看護師のチームにおける看護実践に焦点を当てることによって、移行期の教育プログラムを構築する基礎資料になると考える。

II. 研究目的

2年目看護師は、他職種を含むチームメンバーとのかかわりを通して、チームの一員としてどのように看護を実践しているのか明らかにする。

III. 研究方法

本研究の研究デザインは、質的記述的研究である。関東圏内にある地域の中核的存在の病院2施設を研究協力施設とした。データ収集は、半構造化面接法によるインタビューと参加観察法を用いて、2019年8月から2020年3月に行った。インタビューは研究参加者の臨床経験2年目の9月から3月までの期間に実施した。分析は、インタビューデータを逐語録に起こして読み込み、研究参加者毎に実践の様相について解釈した後に、全ての研究参加者の体験の様相を横断的に概観し、2年目看護師の実践の特徴を表わすテーマを導き出した。本研究は、日本赤十字看護大学の研究倫理審査委員会の承認(承認番号2018-088)と、研究協力施設の研究倫理審査委員会の承認を得て行った。

IV. 結果

研究参加者（以下、参加者）は、2施設の2年目看護師7名であった。インタビューは、一人につき2回、時間数は59分から105分であった。分析の結果、3つの大テーマが導き出された。

1. 自分中心からチーム志向へと考え方や行動の軸が変化する

2年目看護師は、先輩看護師の助言から一つ一つの援助にかかる時間を意識し、無駄な動きを減らし優先順位をつけるようになると、記録をする時間を合間の時間でできるようになっていた。そうすることによって、研究参加者は「余裕の時間」ができ、その時間を使って受け持ち以外の患者の情報を把握していった。また、次の勤務帯のスタッフのことを考えて記録したり、他のスタッフのことを考え情報を収集し伝達することが、チームで動く際に重要であることにも気づくようになっていった。参加者は、1年目の時には、自分がミスしないために分からないことを先輩に聞いていたため、なかなか先輩看護師に声をかけることができなかった。しかし、インシデントや先輩との振り返りを通して、患者のためには先輩に怒られてもいいと考えるようになり、自分だけで悩んで解決できないときにはためらわずに先輩に相談するようになり、患者の安全を第一に考えた行動をとるようになっていった。このように2年目看護師は、自分中心から患者を中心とした看護をチームで実践することへと、考え方や行動の軸が変化していった。

2. 期待される役割に応えようともがく

2年目になると参加者は、一人で出来るようになることも増えてくるが、まだまだ患者の急変と自分の知識が結びつかずに立ち止まることなどもあった。先輩看護師とのやり取りから、知っていて当たり前、出来て当たり前という先輩からの無言のメッセージを感じ、先輩の期待に応えられるようになりたいという思いで日々を過ごしていた。参加者は、病棟内の係やリーダーを担うことで受け持ち以外の患者に関心が広がるようになり、それに伴い周囲のスタッフにも目が向くようになった。一方で、周りの忙しさが見えてくると他のスタッフに助けを求めることを遠慮したり、申し訳なく感じ、自分一人で行うこともあった。先輩看護師から注意を受けるものの、周囲への遠慮からためらいがあった。

後輩を迎えた参加者は、1年目の時の自分と同じ失敗をしないように後輩が困っている場面や危ない場面で声をかけるようになった。自身が1年目の時に先輩看護師から掛けられた「大丈夫」の一言で救われた体験を踏まえて、1年目看護師の「メンタルを守る」ために後輩に積極的に関わり、気に掛けるようになっていった。このように2年目看護師は、先輩と後輩の間で、周囲から期待される役割に応えようともがいていた。

3. 自分なりの看護を探し始める

2年目になると参加者は、自ら調べることで疑問を解決し、知識が増えてきたことを実感していた。また先輩看護師の実践を見て、聞いて、実践を繰り返すことを通して、一年前に聞いた先輩看護師の言葉の意味がやっと分かるようになり、心電図モニターの示すデータから患者の状態の変化が予測できるようになっていた。実践経験の少ない急変場面では、機会を逃さずに、その日のうちに先輩看護師と一緒に振り返りをし、次に生かすにはどうしたらいいのを自分で考えて行動するようになった。参加者は、試行錯誤しながら積極的に学ぶ機会を設け、先輩看護師の援助場面を見て自分が大事にしたい援助についても考えるようになっていた。彼らは先輩看護師のような実践をしたいと憧れ、先輩の援助を自分の中に取り入れようと真似て実践することもあった。その一方で、先輩看護師を反面教師にするなど、先輩看護師の姿からありたい自分を探し、日々試行錯誤を繰り返しながら、自分なりの看護を探し始めていた。

V. 考察

1. 自己からチームへと関心が移行したことの意味

2年目看護師が看護チームの中で看護を実践する特徴の一つは、「余裕の時間」を作る努力を行い、時間管理ができるようになったことである。このことにより、業務遂行への自信ができ、自己に向けていた関心がチームメンバーの動きへと広がり、他のスタッフが受け持っている患者の状態や病棟の業務の全体の流れなどへと視野を広げ、実施できる行動も広がっていったと考えられる。このように、自分からチームへと関心の移行が起こったのは、インシデントを起こした後の先輩との振り返りの中で、患者を守ることが何よりも第一であるというチームの価値観について実感を持って受け止めてきた経験によることが考えられた。この経験には、先輩看護師とのやりとりを通して、先輩看護師の看護に対する考えや優しさに触れ、自分が所属するチームが心理的に安全であると捉えられたことが大きく関わっていた。このような先輩との関わりがあったことで、自分中心から患者第一に考えるチームでの看護という軸に関心が移行していったと考える。

2. チームメンバーの一員として試行錯誤しながらチームの中で成長する

2年目看護師は、独り立ちして新人を指導する立場になり、チーム内での業務やチームリーダー役割を担うことをきっかけに、チームの複数の患者を視野に入れて受持ち患者以外のケアを代わりに行うなど、関心と行動の広がりが見られた。このことが、チームメンバーとしての自覚やチームへの責任、役割への意識の目覚めに繋がり、病棟内での役割を

果たそうと努力することで、その役割に応えようともがき、メンバーの一員としての責任が芽生える契機となっていたと考える。また、1年目看護師の入職に伴い、1年目看護師を指導しサポートすることで、後輩を気遣う先輩としての自分を自覚するようになっていたことが考えられた。

しかし、急変場面などでは自分の知識と行動を結びつけることが難しい状況や、周囲に遠慮して一人で援助を実施している状況もみられた。このように2年目看護師は、周囲の期待に応えチームメンバーとして扱われる実践をしたいという思いと、それができない場面に対する戸惑い、自分一人ではできない場面で先輩の支援を求めてよいのかどうか判断に迷い、葛藤の中で試行錯誤していることが考えられた。

3. 先輩の実践を通して考える自分がしたい看護

2年目看護師は、自らの直接経験と、先輩看護師の援助を見たり助言を受けるなどの間接経験をうまく取り入れながら学びを深めていたことが考えられた。参加者は、先輩看護師の姿を通して患者への援助についての実践的な学びだけではなく、目標となる看護師像を模索していることが考えられた。2年目看護師は、先輩の援助に近づくために日々戸惑いながら工夫して援助を実践し、振り返り、時には先輩の実践に批判的な目を向けながら、試行錯誤を繰り返していることが考えられた。自らの看護の方向性を模索している2年目看護師にとって、先輩看護師は、2年目看護師が求める理想の看護師モデルを描くための具体的な指標であり、自分の目標を現実的に考えるための重要な存在であることが考えられた。

VI. 看護実践への示唆

2年目看護師に見られた、自分中心から患者を中心としたチームでの実践への変化や、チームの一員としての責任や自覚の高まりという変化は、先輩看護師とともに場面状況を丁寧に振り返ることや、病棟内での役割を担うことによってもたらされていた。また2年目看護師にとっては、先輩看護師の援助場面を見る、助言を受けるなどの間接経験も、自らの看護を模索する上で重要であることが示唆された。これらを踏まえ、看護実践力を身に付けていく移行期にあたる2年目の継続教育においては、実践現場の状況を踏まえた、具体的な教育方法やアプローチを検討していく必要があると考える。